

## ■ ■ ■ 編 集 後 記 ■ ■ ■

文字通り大地と人知を震撼させた 3.11 のエネルギー放出は、本当に火山活動の活発化にリンクしているのでしょうか？ なにやら先日観た TV 報道番組によると、昨今(現世)の大きな地震や火山噴火の時系列イベントは、実は奈良時代(9 世紀)の数々の自然災害の履歴に調和的であると解釈され、そうするとごく近い将来には南関東域や南海トラフで想定される惨事が待ち受けていると言うのである。心中穏やかではいられない。◆この季節、週末はニセコの 1000m 台地に立つ機会が多い。近ごろ外国資本でリゾート化が進む“東洋のサンモリッツ”ではあるが、ここも歴然とした活火山である。積雪火山の噴火は恐ろしく、山体斜面を流下する火砕流(泥流)は、ダウンヒルの選手よろしく 30 度超えの急斜面を直滑降しても決して逃げ切れないと聞く。どうやら今シーズンはそれなりの覚悟でリフトに乗ることになりそうだ。◆さて、本誌(第 135 号)の表紙は渡島駒ヶ岳の雄姿です。昭和 4 年(1929)の火山噴火では本格的な火砕流が発生しており山体斜面裾域には今も厚い軽石流堆積物が分布しています。また、支笏湖のコケの洞門で有名な壁岩回廊も実は江戸時代の火砕流堆積物なのです。石材で有名な札幌軟石や月寒台地を形成する地盤も少し古い時代の火砕流堆積物です。決して恐怖を煽っている訳ではなく、火砕流は身近に存在するとの事実を伝えたかっただけです。◆地震・雷・火事・親父。実は最後の親父は father ではなく台風のことらしいです。津波は地震に、洪水や高潮は親父(台風)に含むと考えると、あっ火山災害がない！ もしかしたら火事には火山噴火も含まれるという新解釈もありか!? ◆最後に、本誌の〔会員のひろば〕では従前からの“私のお勧めコーナー”に加えて“私とオリンピック”との題目で新企画が始まりました。札幌でオリンピックが開催されたことを知らない若者もおりますが、本誌の読者層は東京⇒札幌⇒長野とリアルタイムでオリンピックに興奮を覚えた方が多いはずですので、色々なご意見、感想、思い出を是非投稿文としてお寄せ下さい。レジェンドと呼ばれる人気企画にしたいと考えております。

(第 135 号編集担当 知本康男)